〈研究報告〉

体育・スポーツ系学部で教職を目指す学生の介護等体験の評価
― 社会福祉施設と特別支援学校の体験の比較 ―

叶　帝玉[*1]　　家田重晴[*2]　　柿山哲治[*3]

The Evaluation of the Care Experience by Athletic University Students Aiming to Become Teachers
― A Comparison between the Experiences in Social Welfare Facilities and Special Support Schools ―

Diyu YE [*], Shigeharu IEDA [**] , Tetsuji KAKIYAMA [***]

Abstract

This study examines the evaluation of the care experience by students aiming to become health and physical education teachers. Further, the authors focus on the differences in the students' evaluations between social welfare facilities and special support schools. The subjects of the study were 253 seniors (153 males and 100 females) from the School of Health and Physical Education, C University, who took part in the care experience in 2013. A questionnaire survey was carried out on April 1, 2014 and June 26, 2014 (for the students of the elementary school program). For data analysis, the authors used SPSSver22 for Windows.

The results are as follows:

(1) Interestingly, 57 percent of the subjects chose the experience in special support schools for the question item "To become a health and physical education teacher which care experience was more helpful?"

(2) Concerning all the following three question items, more than 95 percent of the subjects gave affirmative answers in both facilities; however, the answers of special support schools were significantly more positive compared to those of social welfare facilities: Q1. "Was your understanding of 'human dignity' deepened?" , Q2. "Was your understanding of 'the principles of social solidarity' deepened?" and Q3. "Were your 'communication skills' improved?"

(3) More than 84 percent of the subjects gave affirmative answers in either facility for both Q4. "Did you have any useful experience for aiming to become a teacher?" and Q5. "Did you have any useful experience for aiming to become a health and physical education teacher?" . In addition, in these question items, the answers of special support schools were significantly more positive than those of social welfare facilities.

[*1] 富田日中貿易有限会社、[*2] 中京大学スポーツ科学部、[*3] 福岡大学スポーツ科学部

Ⅰ　緒言

介護等体験とは、平成10年（1998年）4月1日に施行された「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律」（略称：介護等体験特例法）[1]により、義務教育課程の教員免許を取得する者に義務付けられた学外体験の機会である。そして、義務教育に携わる教員は個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識を深めることが重要だという考えに基づき、社会福祉施設5日間、特別支援学校2日間、計7日間により構成された障害者、高齢者等に対する介護、介助、これらの者との交流等を体験するものである[2]。また、田中・片岡[3]は、「介護等体験を通して、高齢者や様々な障害のある人たちと触れ合う中で、各人の価値観の違いを認められる心を持った人、どんな障害のある人でも共に生きる仲間としてその存在を認め理解できる人、人の心の痛みが分かる思いやりを持った人を作ること、そのような教員を作ることを目的としている」[3]と述べている。

介護等体験に関しては、実践の現状、受け入れ側に対する調査[4]、意義について[5,6]など、いくつかの研究が行われている。特に意義については、笠原・大野[7]が、社会福祉施設での介護等体験の意義について、たとえ直接福祉の職に就かなくとも、一人の人間として福祉や障害・老いについて関心を持ち、理解を深めるとともに、教職に就いたとき、子どもたちに思いやりを伝えていってほしいという願いが込められていると指摘している。また、田中・片岡[5]は、約8割の学生が介護等体験を意義深く、満足のいくものであったと評価しているが、実際に介護等体験を行うことによって具体的にどのような意識の変化があったのかを分析することが必要だと報告していた。

一方、保健体育教師は、保健体育という教科の特性上、他の教科と比べて、統合教育が行いやすいため、特別支援学校だけでなく普通学校の特別支援学級の児童・生徒に、保健体育を教える可能性が高い。障害者が参加できるように修正したり新たに創ったりしたアダプテッド・スポーツ[8-10]の広がりも、体育指導を普通学級と特別支援学級の児童・生徒にいっしょに行う機会を増やしている。

また、体育・スポーツ系学部の学生では、特別支援学校の教師を目指す者も少なくない。したがって、体育・スポーツ系学部で教職を目指す学生にとっての介護等体験は、他教科の教職履修者のそれとは異なる意義を持つ可能性がある。叶ほか[11]は、308名の体育学部生を対象に介護等体験に対する意識調査を実施し、その実態を明らかにした。その結果、社会福祉施設よりも特別支援学校の方が、教職を目指す上で役立つとの回答が多いことなどが分かった。しかし、この他には、体育・スポーツ系学部生を対象として、介護等体験に関する意識を検討した研究は見当たらない。

以上のことから、本研究では、体育・スポーツ系学部で教職を目指す学生が介護等体験をどのように評価しているかについて、「人間の尊厳」や「社会連帯の理念」に関する理解が深まったか、「コミュニケーション能力」は高まったか、教職を目指す上で、および保健体育教師を目指す上で役に立つと思える体験をしたと思うか、の回答から明らかにしようと試みた。また、本研究では、特に社会福祉施設と特別支援学校の回答の違いに焦点を当てることとした。

なお、社会福祉施設が5日間、特別支援学校が2日間と体験の日数が異なるが、いずれも教育実習の3週間（中学校・高等学校）や2週間（小学校）に比べると短く、5日間と2日間の日数の違いは、学生の意識を比較する上で特に考慮しなくても良いと考えた。

Ⅱ　研究方法

1．調査対象および方法

C大学スポーツ科学部において教職課程を履修して2013年度に介護等体験を実施し、2014年度に中学・高校または小学校の教育実習を履修した学生253名（男性153名、女性100名）

を対象として、2014 年 4 月 1 日および 6 月 26 日（小学校免許プログラム生：注 1）に介護等体験に関する無記名の質問紙調査を実施した。対象者 253 名中、有効回答者は男性 134 名、女性 93 名の合計 227 名で、有効回答率は 89.7% であった。

2．調査項目

選択式の調査項目は、学年、性別、社会福祉施設および特別支援学校の種別、どちらの施設が保健体育教師になるために役立つと思ったか、および、おのおの社会福祉施設と特別支援学校の別に、①「人間の尊厳」（例：人の気持ちを考え、人格を尊重する態度等）について理解が深まったと思うか、②「社会連帯の理念」（例：障害者や高齢者と共に生きることの意味を考えること等）について理解が深まったと思うか、③「コミュニケーション能力」（例：誰とでもあいさつや言葉を交わすことできる等）は高まったと思うか、④教職を目指す上で役に立つと思える体験をしたと思うか、⑤保健体育教師を目指す上で役に立つと思える体験をしたと思うか、⑥介護等体験前後における保健体育教師になりたい気持ちの変化、であった。

①から⑤までの項目については、「そう思う」、「どちらかと言えばそう思う」、「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」「わからない」の 5 件法で回答を求めた。⑥の介護等体験前後における保健体育教師になりたい気持ちの変化については、「体験前も後も弱い」、「体験前も後も強い」、「体験前の方が強い」、「体験後の方が強い」の 4 つから選ばせた。

記述式の調査項目は、体験に関する意見や後輩へのアドバイス、および、おのおの社会福祉施設と特別支援学校の別に、介護等体験において教職を目指す上で役に立つと思える体験をしたと思うかどうかの理由、介護等体験において、保健体育教師を目指す上で役に立つと思える体験をしたと思うかどうかの理由、介護等体験で最も大変だったこと、であった。しかし、紙幅の関係で、本論文では記述式項目の結果については扱わず、別の機会にまとめることとする。

3．介護等体験事前指導

C 大学スポーツ科学部生に対しては、3 年次の 3 月下旬に開催される、1 時間半× 3 コマの介護等体験事前指導への出席が義務付けられていた。そこでは、「介護等体験ガイドブック」（注 2）を指導資料として、「1. 介護等体験について」、「2. 社会福祉施設」、「3. 特別支援学校」に関する説明がなされ、介護等体験への心構えについて指導が行われた。

さらに、7 月上旬にも、その年度に介護等体験に出かける学生（部活動の試合などで欠席する学生を除く）に出席させ、介護等体験の事前指導の位置づけで、第 3 著者が「保健体育を通した国際教育協力支援」と題する 1 時間ほどの講義をした。講義では、日本やインドネシアの特別支援学校における体育授業の様子やインドネシアに出かけた際に障害のある生徒に対する体育指導の方法について助言したことなどを話し、学生に講義内容の要点と感想を書かせて提出させた。

4．社会福祉施設と特別支援学校の種類

社会福祉施設の種類は、次のように分けた。

1. 高齢者デイサービス、2. 特別養護老人ホーム、3. 養護老人ホーム、4. 身体障害者通所授産施設、5. 身体障害者療護施設、6. 身体障害者デイサービス、7. 知的障害者通所授産施設、8. 知的障害者更正施設、9. 知的障害児施設、10. 知的障害者デイサービス、11. 障害者授産施設、12. 児童養護施設、13. 母子生活支援施設、14. その他

また、特別支援学校の種類は、次のように分けた。

1. 聴覚障害、2. 知的障害、3. 肢体不自由、4. その他

5．分析方法

選択式では、「人間の尊厳」や「社会連帯の理念」について理解が深まったと思うかなどの回答については、「わからない」を除外し、「そ

う思う」～「そう思わない」の 4 段階の回答を、3 点～ 0 点として平均値を計算した。社会福祉施設と特別支援学校の回答の違いについては、ウィルコクソンの符号付き順位検定を用いた。また、保健体育教師になりたい気持ちの変化については、「体験前も後も弱い」、「体験前も後も強い」、「体験前の方が強い」、「体験後の方が強い」の回答の違いをカイ 2 乗検定で調べることとした。

いずれの場合も、危険率 5%未満を有意とし、データの分析には、SPSSver22 for Windows を使用した。

なお、調査は中京大学大学院体育学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 No. 2013-26）。

Ⅲ　結果

1．介護等体験をした社会福祉施設と特別支援学校の種類

社会福祉施設の種類では、高齢者デイサービス、特別養護老人ホーム、および養護老人ホームを合わせて 67 人（29.6%）、知的障害者更正施設、知的障害児施設、および知的障害者デイサービスを合わせて 42 人（18.5%）、児童養護施設と母子生活支援施設で 33 人（14.5%）、身体障害者療護施設と身体障害者デイサービスで 26 人（11.4%）、身体障害者通所授産施設、知的障害者通所授産施設、および障害者授産施設を合わせて 20 人（8.8%）、その他・重複回答が 39 人（17.2%）であった。

特別支援学校の種類では、聴覚障害が 1 人（0.4%）、知的障害が 132 人（58.1%）、肢体不自由が 55 人（24.2%）、その他・重複回答が 39 人（17.2%）であった。

2．どちらの施設が保健体育教師になるために役立つと思うか（図 1 参照）

「特別支援学校」が 129 名（56.8%）、「両方の施設」が 81 名（35.7%）、「社会福祉施設」が 8 名（3.5%）、「わからない」が 9 名（4.0%）であった。すなわち、6 割弱の学生が特別支援学校の方が保健体育教師になるために役立ったと回答していた。

3．社会福祉施設と特別支援学校の比較（1）（表 1 参照）

Q 1 ：「人間の尊厳」について理解が深まったと思うか

社会福祉施設では、「そう思う」と答えた者が一番多く、155 名（68.6%）であった。次いで、「どちらかと言えばそう思う」が 60 名（26.5%）であった。一方、特別支援学校では、「そう思う」と答えた者が 176 名（77.9%）、次いで、「どちらかと言えばそう思う」が 47 名（20.8%）であった。特別支援学校の方が、肯定的な回答が多かった（ウィルコクソン符号付き順位検定、$p < 0.01$）。

Q 2 ：「社会連帯の理念」について理解が深まったと思うか

社会福祉施設では、「そう思う」と答えた者

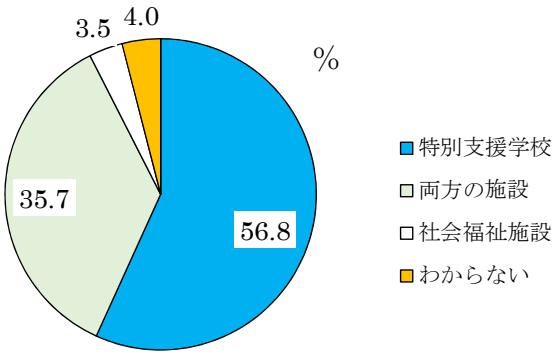

図 1　どちらの施設が保健体育教師になるために役立つと思うか（n = 227）

表１　社会福祉施設と特別支援学校の比較（1）

項目	人数	施設	回答 3点	回答 2点	回答 1点	回答 0点	平均値 社会福祉施設	平均値 特別支援学校	検定[1]
Q1 「人間の尊厳」について理解が深まること	226	社会福祉施設	155 68.6%	60 26.5%	5 2.2%	6 2.7%	2.61	2.76	＊＊
		特別支援学校	176 77.9%	47 20.8%	1 0.4%	2 0.9%			
Q2 「社会連帯の理念」について理解が深まること	224	社会福祉施設	155 69.2%	64 28.6%	3 1.3%	2 0.9%	2.66	2.74	＊
		特別支援学校	170 75.9%	51 22.8%	1 0.4%	2 0.9%			
Q3 「コミュニケーション能力」の高まり	224	社会福祉施設	144 64.3%	69 30.8%	8 3.6%	3 1.3%	2.58	2.67	＊
		特別支援学校	162 72.3%	54 24.1%	5 2.2%	3 1.3%			

注 1）ウィルコクソン符号付き順位検定、＊ $p < 0.05$,　＊＊ $p < 0.01$

が一番多く、155 名（69.2%）で、次いで、「どちらかと言えばそう思う」が 64 名（28.6%）であった。一方、特別支援学校では、「そう思う」と答えた者が 170 名（75.9%）で、次いで、「どちらかと言えばそう思う」が 51 名（22.8%）であった。ここでも、特別支援学校の方が、やや肯定的な回答が多かった（ウィルコクソン符号付き順位検定、$p < 0.05$）。

Ｑ３：「コミュニケーション能力」は高まったと思うか

社会福祉施設では、「そう思う」と答えた者が 144 名（64.3%）、「どちらかと言えばそう思う」が 69 名（30.8%）であった。一方、特別支援学校では、「そう思う」と答えた者が 162 名（72.3%）、「どちらかと言えばそう思う」が 54 名（24.1%）であった。やはり、特別支援学校の方が、やや肯定的な回答が多かった（ウィルコクソン符号付き順位検定、$p < 0.05$）。

４．社会福祉施設と特別支援学校の比較（2）（表２参照）

Ｑ４：教職を目指す上で役に立つと思える体験をしたと思うか

社会福祉施設では、「そう思う」と答えた者が 141 名（63.8%）、「どちらかと言えばそう思う」が 56 名（25.3%）で、「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」を合わせると 198 名（89.1%）であった。一方、特別支援学校では、「そう思う」と答えた者が 181 名（81.9%）、「どちらかと言えばそう思う」が 33 名（14.9%）で、「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」を合わせると 218 名（96.8%）であった。特別支援学校の方が、肯定的な回答がかなり多かった（ウィルコクソン符号付き順位検定、$p < 0.01$）。

Ｑ５：保健体育教師を目指す上で役に立つと思える体験をしたと思うか

社会福祉施設では、「そう思う」が 99 名（47.6%）、「どちらかと言えばそう思う」が 76 名（36.5%）、これらを合わせて 175 名（84.2%）であった。一方、特別支援学校では、「そう思うが 137 名（65.9%）、「どちらかと言えばそう思う」が 58 名（27.9%）、これらを合わせて、195 名（93.8%）であった。特別支援学校の方

が、肯定的な回答がかなり多かった（ウィルコクソン符号付き順位検定、$p < 0.01$）。

5．社会福祉施設と特別支援学校の比較（3）

Q 6：保健体育教師になりたい気持ちはどのように変化したか

社会福祉施設では、「体験前も後も強い」と感じた者が一番多く、130 名（57.5%）で、次いで、「体験後の方が強い」が 64 名（28.3%）であった（表 3）。一方、特別支援学校でも、「体験前も後も強い」と感じた者が一番多く、128 名（56.6%）で、次いで、「体験後の方が強い」が 78 名（34.5%）であった。カイ 2 乗検定の結果、両者の間に有意な違いはみられなかった。

Ⅳ　考察

調査の時期が介護等体験の次年度であったので、記憶が薄れている学生がいたかもしれない。しかし、介護等体験は、学外で行われる活動で、普通得られないような経験ができるため、多くの学生ではその時の印象が強く残っているのではないかと思われる。

介護等体験をした社会福祉施設については、児童および母子の施設が約 15%あったが、多くは高齢者の施設、身体障害者の施設（授産施設を含む）、または 18 歳以上の知的障害者の施設（授産施設を含む）であった。特別支援学校の種類については、知的障害が約 60%で、次いで肢体不自由の約 25%であったが、いずれ

表 2　社会福祉施設と特別支援学校の比較（2）

項目	人数	施設	回答 3 点	回答 2 点	回答 1 点	回答 0 点	平均値 社会福祉施設	平均値 特別支援学校	検定[1]
Q4　教職を目指す上で役立つ体験	221	社会福祉施設	141 63.8%	56 25.3%	17 7.7%	7 3.2%	2.50	2.77	＊＊
		特別支援学校	181 81.9%	33 14.9%	3 1.4%	4 1.8%			
Q5　保健体育教師を目指す上で役立つ体験	208	社会福祉施設	99 47.6%	76 36.5%	24 11.5%	9 4.3%	2.27	2.58	＊＊
		特別支援学校	137 65.9%	58 27.9%	9 4.3%	4 1.9%			

注 1）ウィルコクソン符号付き順位検定、＊＊　$p < 0.01$

表 3　社会福祉施設と特別支援学校の比較（3）

項目	人数	施設	回答[2] 弱い・弱い	回答[2] 強い・強い	回答[2] 前が強い	回答[2] 後が強い	検定[1]
Q6　保健体育教師になりたい気持ちの変化	226	社会福祉施設	16 7.1%	130 57.5%	16 7.1%	64 28.3%	n.s.
		特別支援学校	14 6.2%	128 56.6%	6 2.7%	78 34.5%	

注 1）カイ 2 乗検定　カイ 2 乗＝6.08、 n.s.：有意差なし

注 2）弱い・弱い：「体験前も後も弱い」、強い・強い：「体験前も後も強い」、
前が強い：「体験前の方が強い」、後が強い：「体験後の方が強い」

も対象者が児童生徒であった。このことから、社会福祉施設と特別支援学校では、体験の相手となる人たちの年齢が、かなり異なっていることが分かる。

保健体育教師になるために役立つ施設については、60%弱の学生が特別支援学校での体験の方が保健体育教師になるために役立つと考えていた。逆に、社会福祉施設での体験の方が役立つとする者は、約4%しかいなかった。叶ら[10]の調査結果でも、「教職を目指す上で、どちらの介護等体験が役に立ったと思うか」いう質問で、特別支援学校での体験を選ぶ者が多かったが、本研究では、「保健体育教師になるために」という聞き方をしていたためか、両施設の差がさらに広がっていた。これは、特別支援学校が、学校という点で共通することが一番の理由だと考えられる。

「『人間の尊厳』についての理解の深まり」、「『社会連帯の理念』についての理解の深まり」、および「『コミュニケーション能力』の高まり」のいずれに関しても、どちらの施設でも肯定的な回答が95%以上であったが、社会福祉施設に比べて特別支援学校の回答が、有意により肯定的であった。

これらのことから、いずれの施設でも、大部分の学生が介護等体験を肯定的に捉えていたと考えられる。介護等体験において、施設利用者に接することで、相手の気持ちを理解しようとする姿勢が生まれ、介護のあり方を理解するとともに、コミュニケーション能力を向上させることにつながったのであろう。

次に、「教職を目指す上で役に立つ体験」と「保健体育教師を目指す上で役に立つ体験」についても、同様にどちらの施設でも肯定的な回答が非常に多かった。肯定的な回答は、全体で「教職を目指す上で役に立つ体験」が93%、「保健体育教師を目指す上で役に立つ体験」が89%であった。

以上のことから、本研究では、少なくとも90%程度の学生が、介護等体験に肯定的な評価をしていたと考えられるが、熊谷らの調査[5]でも、特別支援学校の介護等体験について90%以上の学生が体験を有意義だったと評価していた。また、叶ら[11]の報告では、「教職を目指す上で、介護等体験は実施した方が良いと思ったか」の質問に、学生の約80%が「そう思う」、約16%が「どちらかと言えばそう思う」と答え（合計で約96%）、残りの約5%が否定的な回答をするか、「わからない」と答えていた。本研究でも、質問項目が少し異なるが、同様の結果が得られたといえよう。

すなわち、介護等体験に関しては、本研究においても先行研究[5,11]と同様、大多数が肯定的に捉えていた。

ただ、教職を目指す上で、および保健体育教師を目指す上で役に立つ体験については、特別支援学校の回答がより肯定的であった。「そう思う」を比べると、特別支援学校の方がいずれも20%弱高く、「教職を目指す上で役に立つ体験」が80%強、「保健体育教師を目指す上で役に立つ体験」が70%弱であった。

介護等体験で社会福祉施設より特別支援学校の方が教職や保健体育教員になりたい気持ちが高くなる理由としては、社会福祉施設で出会う対象者と特別支援学校で出会う対象者の差異がそのまま出ているのではないか。社会福祉施設では、高齢者や身体障害のある成人が多く、自分が教員になった時に対象とする生徒とは重ね合わせにくく、特別支援学校で出会う対象者は自身が教職についたり保健体育教員になったりした時に、指導する対象者としてイメージしやすかったのではないか。この点に関しては、後日、記述式の回答の分析によって、さらに明確にしたい。

次に、叶ら[11]は、「教職を目指す意欲についての介護等体験の変化」について尋ねているが、その結果は、「かなり高くなった」が30%弱、「やや高くなった」が40%強であった。両者を合計すると70%程度の学生が、介護等体験後に意欲の向上を示していた。しかし、変化についてしか尋ねなかったため、元々意欲の高い者が含まれていたかどうかが分からなかった。

本研究ではその点を考慮して尋ね方を変更

し、「体験前も後も強い」などの選択肢に変更した。その結果、保健体育教師になりたい気持ちについては、施設による違いがあまりなく、体験後の時点でなりたい気持ちの強い者（「体験前も後も強い」と「体験後の方が強い」の合計）が約90％であったが、そのうちの30％強が「体験後の方が強い」としていた。30％強の学生に関しては、いずれの施設においても保健体育教師を目指す学生として、意欲を高めるような有意義な体験ができたと考えられる。

以上、社会福祉施設、特別支援学校のいずれの施設でも、ほとんどの学生が有意義な体験をしているが、社会福祉施設には、前述のようにいろいろな種類がある。そのために、一部の学生がその施設での体験に戸惑った可能性がある。今後、記述式回答をさらに分析し、社会福祉施設の種類のまとまりごとの特徴を調べることにより、事前指導において指導すべき内容に関して有益な知見が得られるであろう。

V　結論

1．社会福祉施設、特別支援学校のいずれの施設でも、大半の学生が有意義な体験をしたと考えられた。「『人間の尊厳』についての理解の深まり」、「『社会連帯の理念』についての理解の深まり」、および「『コミュニケーション能力』の高まり」のいずれに関しても、どちらの施設でも肯定的な回答が95％以上であった。肯定的な回答は、全体で「教職を目指す上で役に立つ体験」が93％、「保健体育教師を目指す上で役に立つ体験」が89％であった。

2．しかし、教職を目指す上および保健体育教師を目指す上では、特別支援学校での体験の方がより役に立つと考える者が多かった。「そう思う」の回答を比べると、特別支援学校の方がいずれも20％弱高く、「教職を目指す上で役に立つ体験」が80％強、「保健体育教師を目指す上で役に立つ体験」が70％弱であった。

本論文は、第2著者と第3著者の指導のもとに制作された、第1著者の2014年度中京大学大学院体育学研究科修士論文の一部を書き改めたものである。

謝辞

本研究のアンケート調査に協力して頂いた、C大学スポーツ科学部の教職課程履修者の皆様、小磯　透教授、杢子耕一教授に心から感謝を申し上げます。また、論文作成に当たってご指導いただいた山田憲政教授に深く感謝いたします。

注釈

1）小学校免許プログラム生は、通信教育で小学校免許の取得を目指している学生であるが、教育実習は3年次の秋学期または春学期に中学、高等学校で3週間または4週間実施し、4年次の秋学期に小学校で2週間実施することになっている。

2）中京大学：2013年度介護等体験ガイドブック．中京大学，2013

引用・参考文献

1）文部科学省：小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律等の施行について，1997 http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19971126001/t19971126001.html アクセス日　2016年9月30日

2）佐伯英人：介護等体験実習が学生の意義に及ぼす影響 －社会福祉施設における実習について－．山口大学教育学部附属教育実習総合センター研究紀要　32：1-6，2011

3）田中敦士，片岡　淳：介護等体験の実践に関する研究（第1報）琉球大学における実践の現状．琉球大学教育学部紀要　69：1-8，2006

4）田中敦士，片岡　淳：介護等体験の実践に

関する研究（第３報）－受け入れ学校および福祉施設に対する質問紙調査から－．琉琉球大学教育学部紀要　70：69-82，2007
5）田中敦士，片岡　淳：介護等体験の実践に関する研究（第２報）－体験学生に対する質問紙調査から－．琉琉球大学教育学部紀要　69：6-19，2006
6）熊谷恵子，中山哲志，小林美千代，松原徳子ほか：介護等体験の実施状況とその意義―事前指導と特殊教育諸学校における体験に参加した筑波大学学生に対するアンケート調査を通して．筑波大学学校教育論集　22：49-55，1999
7）笠原芳隆、大野由三：社会福祉施設における介護等体験学生の状況と実施上の課題．上越教育大学研究紀要　19（2）：675-683，2000
8）金山千弘：日本におけるアダプテッド・スポーツの現状と課題：インクルージョンの普及に伴う学校体育と地域スポーツ．広島大学大学院総合科学研究科，学位（博士）論文要旨，2013
http://www.hiroshima-u.ac.jp/upload/85/others/kiyou/2013/ningen2013-5.pdf　アクセス日　2016年9月30日
9）柿山哲治，Laran Erlani：インドネシアにおける障害児体育の実施状況と教育協力支援の必要性．中田英雄（研究代表者）途上国における特別支援教育開発の国際協力に関する研究（最終報告），平成20年度科学研究費補助金［基盤研究A］研究成果報告書（課題番号17252010）179‐190，2009
http://e-archive.criced.tsukuba.ac.jp/data/doc/pdf/2009/03/200903193378.pdf
アクセス日　2016年9月30日
10）柿山哲治，Djadja Rahardja，Juhanaini，Lalan Erlaniほか：インドネシアにおける障害児体育の実施状況と教育協力支援．体育・スポーツ教育研究　8：12-18, 2008
11）叶　帝玉，村手一斗，小林大地，柿山哲治：体育学部生の介護等体験に対する意識調査．中京大学体育学論叢　54（2）：21-31，2013